

2018(平成30)年度企画展

「簡文館の90年——大学昇格から現在まで——」の記録

年史編纂室

2018年度の年史企画展「簡文館の90年——大学昇格から現在まで——」は、簡文館が竣工九十周年を迎えたことと、2018年3月に大阪府指定有形文化財（建築物）に指定されたことを記念して、簡文館の歴史と見どころを紹介する展示会として開催した。

企画展示室には、展示パネル12枚（ごあいさつ1枚、大1枚、中2枚、小8枚）を掲示し（大パネルのみ本文縦書き）、大型ケースに簡文館に関する現物資料や写真を展示した。

一 展示パネル

ごあいさつ

年史資料展示室では、2018年度の企画展として「簡文館の90年——大学昇格から現在まで——」を開催いたします。

簡文館は、1922（大正11）年の大学昇格による一連の建設工事のなかで、1928（昭和3）年に図書館として竣工し、本2018（平成30）年、90年を迎えました。1955（昭和30）年、90年を迎えました。1955（昭和30）年には、建築家村野藤吾の設計による円形の閲覧室と書庫が増設され、外観が大きく変わりました。正門から法文敷を上がるにつれ、広大なグラウンドや段々畑と呼ばれた閲覧室、その向こうに円形の図書館が見えてくる様子は、長く関西大学のシンボルとして多くの人の記憶に刻まれました。1985（昭和60）年、現在の総合図書館が完成し、1994（平成6）年には博物館へと生まれ変わりました。さらに2007（平成19）年には簡文館は国の登録有形文化財となり、本年、戦後の近代建築としては初めて大阪府指定文化財に指定されました。

今回の企画展では、簡文館の文化財指定を記念し、パネルや写真、ゆかりの品を展示することで、竣工から90年におたる簡文館のあゆみを、多くの方々に知っていただけるよう努めました。この展示を通じて、千里山キャンパスでもっとも古い建物が持っている様々な魅力を感じていただくことができれば幸いです。

最後に、本企画展開催にあたり、ご協力を賜りました関係各位に厚くお礼申し上げます。



ごあいさつ

変わりました。正門から法文坂を上がるにつれ、広大なグラウンドや段々畑と呼ばれた観覧席、その向こうに円形の図書館が見えてくる様子は、長く関西大学のシンボルとして多くの人の記憶に刻まれました。

1985（昭和60）年、現在の総合図書館が完成し、1994（平成6）年には博物館へと生まれ変わりました。さらに2007（平成19）年には簡文館は国の登録有形文化財となり、本年、戦後の近代建築としては初めて大阪府指定文化財に指定されました。

今回の企画展では、簡文館の文化財指定を記念し、パネルや写真、ゆかりの品を展示することで、竣工から90年にわたる簡文館のあゆみを、多くの方々に知っていただけるよう努めました。この展示を通じて、千里山キャンパスでもっとも古い建物を持っている様々な魅力を感じていただくことができれば幸いです。

最後に、本企画展開催にあたり、ご協力を賜りました関係各位に厚くお礼申し上げます。

2018年4月

関西大学年史編纂室

大型パネル

大型パネルは、「大学昇格と簡文館」のタイトルで、1922（大正11）年の大学昇格から図書館が竣工するまでの経過を、当時の写真とともに紹介した。

大学昇格と簡文館

「大学昇格への道のり」

1886（明治19）年11月4日、大阪西区京町堀の願宗寺で創立した関西法律学校は、1903（明治36）年に初めて自前の校舎を西区の江戸堀に建て、その3年後には北区の福島に新たな学舎を建設した。この時点で本学は、すでに「関西大学」の名称を使用していたが、法律的には専門学校令に基づく専門学校であった。

1918（大正7）年、文部省は大学令を公布し、帝国大学と同等の資格を持つ公立と私立の大学設立を認めた。本学が大学令による大学へと昇格するためには、社団法人から財団法人への組織変更とともに、広大な校地や学舎など、教育施設の充実が不可欠であったが、福島学舎の土地は手狭であった。そのため新校地探しを続けた結果、1920（大正9）年4月に大阪府三島郡千里村の土地1万5千坪弱を入手することができた。

写真1 1922（大正11）年頃の関西大学。現在の正門前から第一

学舎方面を望む。「関西大学」の看板付近が現在の正門。

「昇格の実現」

大学昇格のためには多額の資金が必要であった。法学部と商学部の2学部設置を計画していた本学の場合、文部省へ納める供託金は60万円にのぼり、その資金を調達するため、大阪財界の巨頭、山岡順太郎（数々の大企業の社長や重役、さらには大阪商業会議所の会頭も務める）を会長とする関西大学教育拡張後援会を設置し、実業界の援助を仰ぐべく積極的な募金活動を展開した。

1923年 大正12年 3月上旬 親和坂(地獄坂を平坦に改修)

6月 正門の門柱

1925年 大正14年 1月 相撲道場

1926年 大正15年 2月 水道

7月 門柱

8月中旬 グラウンド

10月上旬 クラブハウス

10月24日 グラウンド開場式

1927年 昭和2年 3月下旬 大学本館

6月5日 大学本館竣工式

1928年 昭和3年 4月 図書館

5月 テニスコート

6月21日 図書館 開館

写真5 正門の門柱。1952(昭和27)年までは、現在の尚文館の下をくぐり抜けている坂道に正門があった。

写真6 今も残る門柱

写真7 大学本館。北浜にあった住友合資会社の社屋を譲り受けて移築した。

中型パネル

展示ケース横の中型パネル2枚のうち、1枚は大学昇格当時と現在の千里山キャンパスの航空写真を載せ、キャンパス周辺の景観の変化を示した。また、もう1枚は、千里山キャンパスとほぼ同時期に開発

が行われた、千里山住宅と千里山遊園を紹介するパネルとした。

【中パネル1 空から見た千里山キャンパス】

写真1は、関西大学が大学昇格のため千里山へ移転して、一連の建築工事が終了した昭和初期の千里山学舎を空から見た写真である。中央には1926(大正15)年に完成したグラウンドがあり、このグラウンドを取り巻く高台に、奥から図書館(1928年竣工、現簡文館)、大学本館(1927年竣工)、予科校舎(1922年竣工)、クラブハウス(1926年竣工)が見える。左側にはテニスコート(1928年開設)が写る。写真2は、グラウンドからこれらの学舎を望む写真で、建物は現在の第1学舎がある場所になっていた。写真3は、空から見た2016(平成28)年の千里山キャンパスである。写真のはじめ中央に建つ緑の丸い建物が簡文館で、その奥に1928(昭和3)年竣工の図書館が接続している。キャンパスの面積は大学昇格時の約5万㎡(1万5千坪)から、現在は約35万㎡(11万坪)に広がり、周囲の景観も大きく変わっている。



空から見た千里山キャンパス

写真1は、関西大学が大学昇格のため千里山へ移転して、一連の建築工事が終了した昭和初期の千里山学舎を空から見た写真である。中央には1926(大正15)年に完成したグラウンドがあり、このグラウンドを取り巻く高台に、奥から図書館(1928年竣工、現簡文館)、大学本館(1927年竣工)、予科校舎(1922年竣工)、クラブハウス(1926年竣工)が見える。左側にはテニスコート(1928年開設)が写る。写真2は、グラウンドからこれらの学舎を望む写真で、建物は現在の第1学舎がある場所になっていた。

写真3は、空から見た2016(平成28)年の千里山キャンパスである。写真のはじめ中央に建つ緑の丸い建物が簡文館で、その奥に1928(昭和3)年竣工の図書館が接続している。キャンパスの面積は大学昇格時の約5万㎡(1万5千坪)から、現在は約35万㎡(11万坪)に広がり、周囲の景観も大きく変わっている。



写真2 グラウンドから望む学舎。右側の建物が図書館。(昭和初期)



写真1 昭和初期(1920年代前半)の航空写真。キャンパスを俯瞰から見る。



写真3 2016(平成28)年の航空写真。簡文館を中心としたキャンパスを北西側から見る。

中パネル1 「空から見た千里山キャンパス」

ウス（1926年竣工）が並ぶ。左端にはテニスコート（1928年開設）が写る。写真2は、グラウンドからこれらの学舎を望む写真で、建物は現在の第1学舎がある場所に建っていた。

写真3は、空から見た2016（平成28）年の千里山キャンパスである。写真のほぼ中央に建つ緑の丸い建物が簡文館で、その奥に1928（昭和3）年竣工の図書館が接続している。キャンパスの面積は大学昇格時の約5万㎡（1万5千坪弱）から、現在は約35万㎡（11万坪弱）に広がり、周囲の景観も大きく変わっている。

写真1 昭和初期（1930年前後か）の航空写真。
キャンパスを南西から見る。

写真2 グラウンドから望む学舎。右端の建物が図書館。（昭和初期）

写真3 2016（平成28）年の航空写真。
第1学舎を中心にキャンパスを北西から見る。

〔中パネル2 大学昇格頃の千里山〕

関西大学が移転を決めた頃の千里山は、開発が進みつつある地域であった。1921（大正10）年、北大阪電気鉄道（現在の阪急千里線）が開通する。当時の終点であった千里山駅の西側では、後に本学の総理事兼学長となる山岡順太郎が社長を務めた、大阪住宅経営株式会社によって、千里山住宅の開発が始まっていた。

また、現在の関西大学第一高等学校・第一中学校の辺りには、北大阪電気鉄道により1920（大正9）年に遊園地の千里山花壇が開園した。この遊園地は自然の景観を残した中に運動場や野外音楽堂、飛

行塔、小動物園などを設け、家族連れで賑わった。また、桜、桃、菊、紅葉の名所としても有名で、季節ごとに多くの見物客が訪れた。

関西大学は、このように北は新興の住宅地、南は遊園地に挟まれた場所をキャンパスとして、1922（大正11）年6月5日、大学に昇格するのである。

写真1 1939（昭和14）年発行の千里山花壇パンフレット。

1950（昭和25）年、遊園地跡地を本学が購入した。

飛行塔（絵図左上）の辺りが第3学舎（社会学部）、音楽

大学昇格頃の千里山

関西大学が移転を決めた頃の千里山は、開発が進みつつある地域であった。1921（大正10）年、北大阪電気鉄道（現在の阪急千里線）が開通する。当時の終点であった千里山駅の西側では、後に本学の総理事兼学長となる山岡順太郎が社長を務めた、大阪住宅経営株式会社によって、千里山住宅の開発が始まっていた。

また、現在の関西大学第一高等学校・第一中学校の辺りには、北大阪電気鉄道により1920（大正9）年に遊園地の千里山花壇が開園した。この遊園地は自然の景観を残した中に運動場や野外音楽堂、飛行塔、小動物園などを設け、家族連れで賑わった。また、桜、桃、菊、紅葉の名所としても有名で、季節ごとに多くの見物客が訪れた。

関西大学は、このように北は新興の住宅地、南は遊園地に挟まれた場所をキャンパスとして、1922（大正11）年6月5日、大学に昇格するのである。



1939（昭和14）年発行の千里山花壇パンフレット。
1950（昭和25）年、遊園地跡地を本学が購入した。
飛行塔（絵図左上）の辺りが第3学舎（社会学部）、音楽堂（絵図中央）の辺りが1950年度記念館、大連閣（絵図右下）の1階部分が見える現在の第一高等学校のグラウンドである。



園遊地花山里千

1930（昭和5）年、新校舎の落成により千里山キャンパス。写真1は当時の遊園地の跡地。第一高等学校・第一中学校の校舎となるが、白のインフレットと見比べると、音楽堂や飛行塔など遊園地時代の景観が分かる。写真2（上図）は、遊園地に広がる千里山花壇の航空写真。

中パネル2 「大学昇格頃の千里山」

堂（絵図左中）の辺りが100周年記念会館、大運動場（絵図右下）は千里線から見える現在の第一高等学校のグラウンドである。

写真2 1953（昭和28）年頃の空から見た千里山キャンパス。

写真右下の千里山花壇の跡地は、第一高等学校・第一中学校の校地となるが、右のパンフレットと見比べると、音楽堂や遊技場など遊園地時代の痕跡が分かる。写真左上部には、放射状に広がる千里山住宅が写る。

二 小型パネル

小型パネルでは、1928（昭和3）年竣工と1955（昭和30）年竣工の建物を中心に、簡文館の歴史と建物の見どころを紹介した。

【小パネル1 簡文館前史】

関西大学の図書館施設は、関西大学が興正寺を校舎としていた頃まで遡る。1894（明治27）年制定の「事務章程」には、書籍や書籍目録の管理について定められている。このことから、興正寺の一角に図書を受納する場所があったようで、興正寺時代に受け入れた蔵書の一部は今に引き継がれ、現在の総合図書館に配架されている。

独立した図書館は、1914（大正3）年に設置された。福島学舎の入り口脇にあった二階建て洋風建築の小さな図書館で、1922（大正11）年頃の蔵書数は1万冊ほどであった。

大学に昇格して間もない1922（大正11）年9月、第2学期始業式の式辞で総理事山岡順太郎は「そもそも図書は大学の生命である。」

と述べていた。図書館の建設は、大学昇格を果たした関西大学にとって、はずすことのできない重要な施策であった。

写真1 関西大学が興正寺にあった時代の蔵書。1888（明治21）年に本学創立者の一人である井上操が寄贈した。

写真2 1914（大正3）年に設置された福島学舎図書館。

写真3 福島学舎図書館 閲覧室の様子。

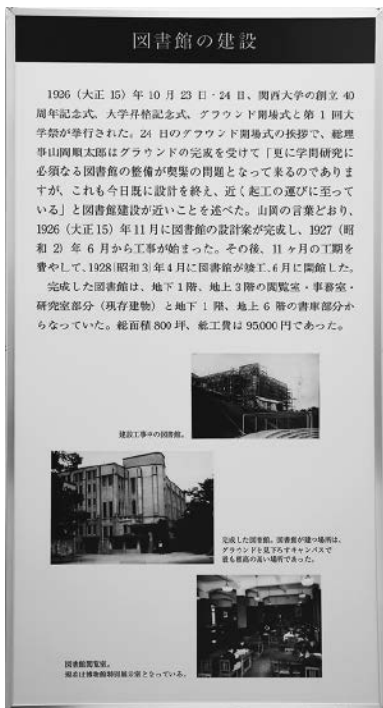
【小パネル2 図書館の建設】

1926（大正15）年10月23日・24日、関西大学の創立40周年記念式、大学昇格記念式、グラウンド開場式と第1回大学祭が挙行された。24日のグラウンド開場式の挨拶で、総理事山岡順太郎はグラウンドの完成を受けて「更に学問研究に必須なる図書館の整備が喫緊の問題となって来るのであります。これも今日既に設計を終え、近く起工の運びに至っている」と図書館建設が近いことを述べた。山岡の言葉どおり、1926（大正15）年11月に図書館の設計案が完成し、1927（昭和2）年6月から工事が始まった。その後、11ヶ月の工期を費やして、1928（昭和3）年4月に図書館が竣工、6月に開館した。完成した図書館は、地下1階、地上3階の閲覧室・事務室・研究室部分（現存建物）と地下1階、地上6階の書庫部分からなっていた。総面積800坪、総工費は95,000円であった。

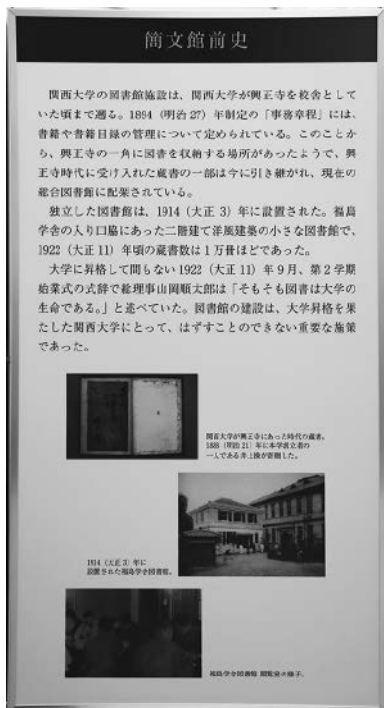
写真1 建設工事中の図書館。

写真2 完成した図書館。図書館が建つ場所は、グラウンドを見下ろすキャンパスで最も標高の高い場所であった。

写真3 図書館閲覧室。現在は博物館特別展示室となっている。



小パネル2 「図書館の建設」



小パネル1 「簡文館前史」

【小パネル3 簡文館の見どころ①】

1928（昭和3）年竣工の図書館は、学内初の鉄筋コンクリート造の建物であった。外観は、鋭くとがった塔の形を模した装飾用の付柱（ピラスト）が均等に配置され、その付柱の間に、縦長の窓が並ぶ。2階と3階の窓の境目は、はざま飾り（トレーサリー）で装飾する。階段室は塔屋とし、全体的に垂直性を強調したゴシック様式の意匠を持つ。外壁は、モルタルを箒やササラで掃き付けた、凹凸のあるドイツ壁とする。

建物内部は建物を支える梁が露出し、その梁には面取りが施されている。廊下や階段は1・5メートルほどの高さまで布目タイルを貼り、その上部から天井までは漆喰を塗る。壁と天井の境目は、漆喰による簡素な廻り縁で装飾する。主要な部屋につながる扉や受付窓口は上部を半円形とし、ぶどう模様のレリーフを飾っている。

閲覧室は天井の高い大空間で、柱や壁に板材で腰壁をめぐらす、質素なしつらえとなっている。

写真1 外壁の付柱とはざま飾りの装飾。2階窓のひし形格子は後補のもの。

写真2 壁面を飾る布目タイル。

写真3 扉を飾るぶどう模様のレリーフ。

写真4 階段室では、面取りを施したアーチ型の梁や天井の廻り縁、受付窓口のレリーフを見ることができる。

【小パネル4 図書館の増築】

関西大学は、学制改革により1948（昭和23）年に新制大学とし

て認可を受け、法・文・経・商の4学部を設置した。その後、学科の増設や新制大学院の設置が続き、図書館の蔵書が急激に増加していった。そのため、創立70周年記念事業の一つとして、図書館の増築が計画された。増築工事は1954（昭和29）年12月に始まり、1955（昭和30）年10月に竣工した。設計は本学の学舎設計を数多く手掛けた村野藤吾が担当した。

この工事によって、もとの図書館の西側に、3階建の円形図書館と6階建の書庫が増築された。円形図書館は3階を開架閲覧室とし、150席の閲覧席を設けた。書庫は86,000冊の収容力を持ち、旧書庫とあわせて約19万冊の図書を収容できるようになった。

写真1 増築された書庫（左）と円形図書館。広場から2階へつながるスロープが設置されていた。

写真2 スロープと書庫の外観。書庫の外壁にも、カラフルなタイルが貼ってあった。

写真3 南側から見た円形図書館。1978（昭和53）年、施設の狭隘化のため、1階ピロティの南側を事務室に改装している。

【パネル5 村野藤吾 1891～1984】

佐賀県唐津市に生まれる。早稲田大学理工学部卒業。1918（大正7）年、大阪の渡辺節建築事務所就職し、一貫して大阪を本拠地として活躍。1929（昭和4）年、村野建築事務所を開設した。独立後は旧そごう大阪店（現存せず）、新歌舞伎座（現存せず）、梅田吸気塔など大阪の都市景観に欠かせない建築物を設計した。また、大阪

以外でも、渡辺翁記念会館（宇部・重要文化財）、世界平和記念聖堂（広島・重要文化財）、尼崎市庁舎、カトリック宝塚教会、日生劇場（東京）など、全国各地に300を超える作品を残している。1967（昭和42）年、文化勲章を受章。

村野は、戦後間もない1949（昭和24）年から1980（昭和55）年の約30年にわたって、関西大学の約40棟の建物設計に携わった。一人の建築家がこれほどの長期間、一つのキャンパスの設計に関与し続ける例は少ない。起伏にとんだ千里山キャンパスで、それぞれの場所、その時々々のニーズに応じて建物は配置された。外観だけでなく、壁面のタイルや階段の形もそれぞれ異なり、建物それぞれが時代にとらわれず、個性的で変幻自在な意匠・表情を持つ。施設の更新により失われたものも多いが、約半数の施設が現存している。

写真1 簡文館前の村野藤吾

写真2 千里山キャンパスの代表的な村野建築

KUシンフォニーホール（1962年）

円神館（1964年）

社会学部 第3学舎1号館（1968年）

【パネル6 簡文館の見どころ②】


図書館の増築部分は鉄筋コンクリート造で、図書館の出入り口があった南西角に3階建の円形図書館が、もとの書庫の西側に接続して6階建の書庫が建設された。

増築された円形図書館の外観は、均等に並んだ柱が壁面を区切り、その柱の間には、焼成時に塩水を使うこげ茶色の塩焼きタイルを貼る。


図書館の増築

関西大学は、学制改革により1948（昭和23）年に新制大学として認可を受け、法・文・経・商の4学部を設置した。その後、学舎の増設や新制大学院の設置が続き、図書館の蔵書が急激に増加していった。そのため、創立70周年記念事業の一つとして、図書館の増築が計画された。増築工事は1954（昭和29）年12月に始まり、1955（昭和30）年10月に竣工した。設計は本学の学舎設計を数多く手掛けた村野藤吾が担当した。


この工事によって、もとの図書館の西側に、3階建の円形図書館と6階建の書庫が増築された。円形図書館は3階を開架閲覧室とし、150席の閲覧席を設けた。書庫は86,000冊の収容力を持ち、旧書庫とあわせて約19万冊の図書を取替できるようにした。



増築された書庫（左）、円形図書館。閲覧室の2階部分の大きなスペースが設けられた。



3階のバルコニー部分のモザイク。



円形図書館の3階にある閲覧閲覧席。


小パネル4「図書館の増築」

簡文館の見どころ 1


1928（昭和3）年竣工の図書館は、学内初の鉄筋コンクリート造の建物であった。外観は、鋭くとがった塔の形を模した装飾用の付柱（ピラスター）が均等に配置され、その付柱の間に、縦長の窓が並ぶ。2階と3階の窓の境目は、はざま飾り（トレーサリー）で装飾する。階段室は塔屋とし、全体的に垂直性を強調したゴシック様式の意匠を持つ。外壁は、モルタルを薄やササで掃き付けた、凹凸のあるドイツ壁とする。

建物内部は建物を支える梁が露出し、その梁には面取りが施されている。廊下や階段は、1.5メートルほどの高さまで有日タイルを貼り、その上部から天井までは漆喰を塗る。壁と天井の境目は、漆喰による簡潔な廻り縁で装飾する。主要な部屋につながる扉や受付窓口は上部を半円形とし、ぼどう模様のレリーフを飾っている。


閲覧室は天井の高い大空間で、柱や壁に板材で腰壁をめぐらす、質素なしつらえとなっている。




外観にははざま飾りの装飾。2階窓のピラスターが並ぶ。



はざま飾り（トレーサリー）のレリーフ。



階段室では、面取りを施したアーチ型の窓や扉の廻り縁、受付窓口のレリーフをみることもできる。



壁と貼る有日タイル。


小パネル3「簡文館の見どころ①」

簡文館の見どころ 2

図書館の増築部分は鉄筋コンクリート造で、図書館の出入口があった南西角に3階建の円形図書館が、もとの書庫の西側に接続して6階建の書庫が建設された。

増築された円形図書館の外観は、均等に並んだ柱が壁面を区切り、その柱の間には、焼成時に塩水を使うこげ茶色の塩焼きタイルを貼る。2階のバルコニー部分は塩焼きタイルのほかに、青・緑・黄のタイルを用いてモザイクを施す。

1階はピロティで、その中央にはなめらかな曲線が印象的ならせん階段があり、2階はらせん階段を囲んだ部屋が並ぶ。3階は開架閲覧室で、天井が高く、ゆったりとした空間である。縦長の窓が8つ並び、窓の上部はガラスブロックがはめ込まれている。さらにその上には横長の高窓が18ある。円形のガラスブロックによる天窓もあり、閲覧室には様々な角度から光が差し込んでいた。




増築された円形図書館の外観。



2階バルコニー部分のモザイク。



円形図書館の3階にある閲覧閲覧席。




高窓の中央にはらせん階段。

小パネル6「簡文館の見どころ②」


村野 藤吾 1891～1984

佐賀県唐津市に生まれる。早稲田大学理工学部卒業。1918（大正7）年、大阪の浅野建築事務所に入職し、一貫して大阪を本拠地として活躍。1929（昭和4）年、村野建築事務所を開業した。独立後は日そごう大飯店（現存せず）、新歌舞伎座（現存せず）、梅田電気塔など大阪の都市景観に欠かせない建築物を設計した。また、大阪以外でも、流道翁記念会館（宇都・重要文化財）、世界平和記念堂（広島・重要文化財）、尼崎市庁舎、カトリック宝塚教会、日生劇場（東京）など、全国各地に300を超える作品を残している。1967（昭和42）年、文化勲章を受章。


村野は、戦後最も多い1949（昭和24）年から1980（昭和55）年の約30年におわたって、関西大学の約40種の建物設計に携わった。一人の建築家がこれほどの長期間、一つのキャンパスの設計に関与し続ける例は少ない。起伏にこんだ千原山キャンパスで、それぞれの場所、その時代のニーズに応じて建物は配置された。外観だけでなく、壁面のタイルや階段の形もそれぞれ異なり、建物それぞれが時代にとらわれず、個性的で夢幻自在な意匠・表情を持つ。施設の更新により失われたものも多いが、約半数の施設が現存している。




村野藤吾の肖像画。



新大阪キャンパスの旧図書館（1928年）



円形館（1955年）



学生会館（現・学生会）（1967年）

小パネル5「村野 藤吾 1891～1984」

2階のバルコニー部分は塩焼きタイルのほかに、青・緑・黄のタイルを用いてモザイクが施す。

1階はピロティで、その中央にはなめらかな曲線が印象的ならせん階段があり、2階はらせん階段を囲んで部屋が並ぶ。3階は開架閲覧室で、天井が高く、ゆったりとした空間である。縦長の窓が8つ並び、窓の上部はガラスブロックがはめ込まれている。さらにその上には横長の高窓が18ある。円形のガラスブロックによる天窓もあり、閲覧室には様々な角度から光が差し込んでいた。

写真1 現在の簡文館の外観

写真2 円形図書館の3階にあつた開架閲覧室

写真3 2階バルコニー壁面のモザイク

写真4 曲線が印象的ならせん階段

【小パネル7 図書館から博物館へ】

新学部の設置、学生数の増加、教育研究の発展や進歩の著しい情報通信技術への対応のために、1985（昭和60）年に現在の総合図書館が開館した。旧図書館は「簡文館」と命名され、人権問題研究所、東西学術研究所、考古学等資料室が移転した。考古学等資料室はもとの閲覧室を一新して展示室とした。

1994（平成6）年、考古学等資料室は博物館法に基づく博物館相当施設として承認を受け、関西大学博物館が開館した。さらに2006（平成18）年には関西大学のあゆみを展示する年史資料展示室も設置され、簡文館は一般公開施設が集まる関西大学の文化ゾーンとなった。

また、2005（平成17）年、文部科学省のオープン・リサーチ・センター整備事業に採択され、「関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター」が発足した。簡文館の書庫部分を撤去しセンター棟が建設され、現在は「関西大学なにわ大阪研究センター」として、大阪で生まれ育まれてきた関西大学における大阪研究の拠点となっている。

写真1 博物館常設展示室

写真2 博物館特別展示室

写真3 書庫跡に設置された関西大学なにわ大阪研究センター

【小パネル8 簡文館の文化財指定】

簡文館は円形図書館が増設された1955（昭和30）年と、書庫跡にセンター棟が建設された2006（平成18）年に大きく姿を変えた。しかし、1928（昭和3）年竣工の建物は、昭和初期の大学図書館建築として代表的なものであることや、1955（昭和30）年増築の円形図書館は、建築家村野藤吾の代表作の一つと目される建築であることが評価され、2007（平成19）年に国の登録有形文化財（建築物）として登録された。

さらに、簡文館は大学のシンボルの存在として大切に使用され、大阪の近代期における高等教育機関の施設として価値を有していることから、2018（平成30）年、重ねて大阪府の指定文化財に指定された。この指定は、①戦後の建築物として、②大学の建築物として、③村野藤吾の建築物として、大阪府では初めての指定となり、簡文館の90周年に花を添える慶事であった。

写真1 1975（昭和50）年ごろの簡文館遠景。大きなグラウ

簡文館の文化財指定

簡文館は円形図書館が増設された1955（昭和30）年と、書庫新にセンター棟が建設された2006（平成18）年に大きく姿を変えた。

しかし、1928（昭和3）年竣工の建物は、昭和初期の大学図書館建築として代表的なものであることや、1955（昭和30）年増築の円形図書館は、建築家村野藤吾の代表作の一つと目される建築であることが評価され、2007（平成19）年に国の登録有形文化財（建築物）として登録された。

さらに、簡文館は大学のシンボリック存在として大切に使用され、大阪の近代期における高等教育機関の施設として価値を有していることから、2018（平成30）年、重ねて大阪府の指定文化財に指定された。この指定は、①戦後の建築物として、②大学の建築物として、③村野藤吾の建築物として、大阪府では初めての指定となり、簡文館の90周年に花を添える慶事であった。



1955（昭和30）年竣工の簡文館建築。大阪大学が中心となり、近畿大学や同志社大学、その他の同様に丸い形の特徴のある建築は、関西大学の代表的な風景であった。



戦後増築された円形図書館の北半分の様子。かつては図書から、大阪府指定文化財となることとなった。



2018（平成30）年の大阪府指定文化財の指定。丸い形の特徴が、登録有形文化財の目的が顕著である。

小パネル8 「簡文館の文化財指定」

図書館から博物館へ

新学部の設置、学生数の増加、教育研究の発展や進歩の著しい情報通信技術への対応のために、1985（昭和60）年に現在の総合図書館が開館した。旧図書館は「簡文館」と命名され、人権問題研究所、東西学術研究所、考古学等資料室が移転した。考古学等資料室はもとの閲覧室を一新して展示室とした。

1994（平成6）年、考古学等資料室は博物館法に基づく博物館相宜施設として承認を受け、関西大学博物館が開館した。さらに2006（平成18）年には関西大学のあゆみを展示する年史資料展示室も設置され、簡文館は一般公開施設が集まる関西大学の文化ゾーンとなった。

また、2005（平成17）年、文部科学省のオープン・リサーチ・センター整備事業に採択され、「関西大学なにお・大阪文化遺産学術センター」が発足した。簡文館の書庫部分を搬出しセンター棟が建設され、現在は「関西大学なにお大阪研究センター」として、大阪で生まれ育まれてきた関西大学における大阪研究の拠点となっている。



博物館相宜施設



博物館相宜施設



増築に設けられた関西大学なにお大阪研究センター

小パネル7 「図書館から博物館へ」

ンド、段々畑と呼ばれた観覧席、その向こうに見える円形の図書館は、関西大学の代表的な風景であった。

写真2 第1学舎1号館から見た簡文館とあすかの庭。かつては

簡文館から、大阪市街も展望することができた。

写真3 クスノキの大木が寄り添う簡文館の南側。木の陰になっ

ているが、壁面の茶と白の対照が鮮やかである。

三 展示資料

縦型展示ケースには、簡文館にかかわる様々な資料の展示を行った。展示資料とそれぞれの資料に対する解説文は次の通りである（本文横書き）。

「記念メダル」

第1回大学祭（右）と関西大学向上記念（左）のメダル。第1回大学祭は、1926年10月24日に開催され、同日のグラウンド開場式で、山岡総理事は図書館建設が急務であることを説いた。

大学昇格後、本学の専門部生は専門部の資格向上を求め活発な運動を展開した。その結果、専門部は高等学校、大学予科と同等以上の学力と認められ、専門部正科卒業生は大学への入学が可能となった。その記念として向上記念メダルが作られた。メダルに刻まれた1924年5月22日は、資格認定が官報に告示された日付である。

「関西大学図書館配景図」

『千里山学報』新年号（1927年1月1日発行）の表紙に掲載され



展示資料

た図書館配景図（完成予想図）。『千里山学報』は、大学昇格にともない発刊された定期機関紙で、教職員や学生の研究・文芸発表や、校友間の連絡の場となった。第1号は大学昇格直後の1922年6月15日に刊行され、後に『関西大学学報』と改称し、1968年3月発行の第350号まで続いた。

「図書館建設関係書類」

図書館に暖房用のボイラーを設置するため、総理事山岡順太郎から大阪府知事田辺治通あてに提出された認可申請書。1928年2月24

日付で認可されている。

「拡充計画完成記念パンフレット」

創立70周年記念事業として実施された、第1次拡充5ヶ年計画の完成を記念して、1955年11月に発行されたパンフレット。第1次5ヶ年計画では、村野藤吾の設計により、円形図書館や旧第1学舎、第1高等学校・中学校舎などが建設された。

「旧第1学舎1号館のタイル」

旧第1学舎1号館の壁面を飾ったタイル。同じようなタイルが、簡文館（円形図書館）でも使用されている。旧第1学舎1号館はあすかの庭辺りにあり、現在の第1学舎1号館の建設により取り壊された。

「卒業記念のオルゴール」

簡文館の円形図書館と書庫（現存せず）をかたどった、卒業記念のオルゴール。書庫の屋根を開くと可憐な響きで学歌が流れる。1970年前後に頒布されていた。（麻生川章氏寄贈）

「円形図書館と観覧席 写真」

1959年、多比良敏雄撮影。多比良敏雄（1911～1983）は、関西の建築写真家の草分けとして、村野藤吾をはじめとして、吉田五十八、前川国男、丹下健三ら著名な建築家の作品を多く撮影している。1977年、建築写真を通じて建築界に多大な功績を残したことにより、第2回吉田五十八特別賞を受賞。

村野藤吾は、多比良敏雄の仕事に信頼を寄せ、その撮影に数多く立
会ってアングルの確認を自ら行うなど、深い交流があつた。

(年史編纂室)